

# ザーヤンデルードの用水配分に関する一考察

岡 崎 正 孝

は し が き

イラン高原中央部を流れ、エスファハン地方に恵みをもたらしてきたザーヤンデルード〔川〕の水は、古来、慣行に基づき、水利権を有する村々の間で配分されてきた。一九世紀の地誌『エスファハン地誌』は、「正義の諸王の時代に、この川の〔水利〕秩序を保つため、知事と技師に命じて、各地区 (bogh) および各村の面積、土地の吸水力をはからせ、それぞれの土地の〔用水の〕適正量を決めさせた。そして、ミーループに命じて各地の用水配分を行わせた」と伝えており、イブン・ルスタは、サーサーン朝のアルダシール一世 (二三二―二四〇) が初めてこの川の用水配分の規則を制定した、と述べている。<sup>(2)</sup> この川の用水配分慣行は、遅くとも、サーサーン朝下では確立していたものと思われる。

しかし、エスファハンが首都となったサファヴィー朝下 (一五〇一―一七二三) で、伝統的用水慣行が大幅に改められ、ザーヤンデルードの用水配分に関する一考察 岡崎

められ、さらに、カージャール朝下（一七九六—一九二五）においても、大きな変更をみた。本稿では、一九世紀の地誌および筆者が入手した配水文書から、この川の配水慣行の実態を紹介するとともに、用水配分がどのようにして更改されたかをみることに、イラン農業で土地以上に重要な要素である水を支配する論理は何であったかを明らかにしたい。

# 1 シエイフ＝バハーイーのトゥーマールについて

サファヴィー時代に勅令によって、配水慣行が改められた。この勅令は「シエイフ＝バハーイーのトゥーマール（巻物）」（Tumār-e Sheikh Bahāʾī）と称され、シエイフ＝バハーイーによって作成されたとされている。勅令の内容は、一九三七年に A・K・S・ラムトンによって紹介され、さらにトゥーマール全文はエスファハン大学のマフムディヤーン氏の著作（Zayandeh Rūd-e Esfahān）に収録されている。<sup>(4)</sup>

トゥーマールの主文は次の通りである。

彼は至高なる神にして、その御力は全能なり。

天に住み、樂園に住まわれる君主、シャー＝タフマースプ（神よその墓所を照らしたまへ）の印璽

ここに勅令が下された。祝福されし川、エスファハンのザーヤンデルドの村々の間で「その」持分に関し係争が生じているので、有能なる政府の高官、最も信頼の置き、最も高齢な人々の中から数人が任命され、偉大な

るモストウフィー達の署名並びに〔川に〕共有の権利を有するボルークのキヤドホダー及びリーシュセフィード達の確認のもとで、各ボルークのすべての村々 (*qorā o mazāre*) の持分 (*seḥām o ḥesṣeṣi*) が、虚偽と作為なく、その土地の能力及び必要性に基づき決定され、これを施行すべく、拘束力ある契約として (*dar qeide al-etteṣām*) 登記される。ジェイ・ボルークは祝福されし川で灌漑されているボルークの中央に位置しているため、古来、祝福されし川のミーループ職は、同ボルークの信頼の置き信用のあるキヤドホダーの中の一人に委ねられており、これに従うものとする。

各ボルークの代官 (*āmel ya zābet*)、キヤドホダー及びリーシュセフィード、祝福されし川のミーループ、モバーシエル、マードイー・サーラール及び他の水役 (*amaleḥ*) は、この命令に従い、トゥーマールの規定に基づき、それぞれの引水権 (*ḥaqqābet*) を認め、持分及び取り決めを実施すべし。これに違反する行為は許されず、思慮深き有能なる政府の役人により処罰されるものとする。

九二三年ラジャボル・モラッジャブ月

〔二五・一七・七八月〕

世界征服の君主 (*navvāb-e gū setān*) の命令、モストウフィーの署名並びにキヤドホダー及びリーシュセフィード達の確認に基づくエスファハンのザーヤンデルードの祝福されし川の水の配分の取り決めは、下記の通りである。

(以下略)

さて、このトゥーマールの冒頭には、シャー・タフマースプの名があり、主文の日付は「九二三年ラジャボル・モラッジャブ月（二五二七年七月／八月）」、さらにこれはシェイフ・バハイーのトゥーマールと称されている。しかし、表題にあるタフマースプの在位は九三〇―八四（一五二四―七六）年であって、公布の日付とされる九二三年とは矛盾する。九二三年は初代エスマーイルの統治期である。また、この勅令を作成したとされるシェイフ・バハイーは、九五三（一五四七）年にシリアのジャバル・アーミラに生まれたシーア法、天文学、数学の権威で、イランに招かれ、第五代の王シャー・アッバース（在位九八九―一〇三八、一五八一―一六二九）に重用され、宗教顧問などを務めた人物である（一〇三七、一六二七／二八年<sup>(5)</sup>没）。九二三年は彼の出生前である。

トゥーマールの記述からは、この勅令が誰によって、いつ公布されたかは明らかでない。この点について、ラムトン<sup>(6)</sup>は、九二三年は誤記であり、トゥーマールの随所に「故サドルによって与えられた持分……」との記述があるところより、トゥーマールはシャー・アッバース以前に制定されたが、彼のもとでエスファハンのサドルになったシェイフ・バハイーによって改訂され、現在に伝わっているものはこの改訂版である、と解釈している。

また、ジャヴァーヘル・キヤラームは、

（イ） 九二三年には、エスマーイルはトルコ軍との戦いのためナフジャヴァーンにおり、彼には、ザーヤンデルドのことは念頭になかったはずである。

（ロ） タフマースプは九三〇年に即位したが、九三五年まではホラーサーンでウズベクとの戦いに没頭してい

た。

(一八) 勅令の用語法および若干の用語は、一九世紀のものに類似している。

(二) 受益村の中には、九二三年には存在せず、サファヴィー朝中期にできたものが含まれており(たとえば、Talār-e Ashraf, Jāme'-ye 'Abhāsī, Sa' datābād, Hasht Behesht など)、トゥーマールはサファヴィー朝期には存在したが、これが実施されなかったか、何らかの理由によって失われており、後代に、現在のものに書き改められたと考えられる、と述べている。<sup>(7)</sup>

また、マフムディヤーンは、ミールファズロッラー「シャハレスターニー (Mir Fazlollāh Shahrastānī) が作ったものを、シェイフ「バハーイーが偉大な学者であったことから、シャ「アッバースの治下で彼の名で登記された、との説をとっている。<sup>(8)</sup>

この問題に関し結論を下すことはできないが、トゥーマールの「世界征服の君主 (navvāb-e giti-satān) の命令」なる文言は、これに何らかの手がかりを与えるのではなからうか。一九世紀の地誌、ファサーイーの『ファールス・ナーメ』には、Shāhanshāh-e giti satān-e Shāh Esmā'īle-Avval とし記述があり、<sup>(9)</sup> 二つでは giti satān は初代のシャ「エスマーイールを指している。もしサファヴィー朝下でもこれが『ファールス・ナーメ』と同じように用いられていたとしたなら、九二三年はラムトンのいうように誤記ではなく、エスマーイールがこの年にトゥーマールを下したと考えることができる(ただし、この語が特定の王を指すものかどうか明らかでないが)。そして、これが第二代のタフマースプの治下で改訂され、さらに大々的な更改がなされたシャ「アッバースの下で、シェ

イフ「バハーイーが何らかの形で関与し、「シェイフ「バハーイーのトゥーマール」として公布されたものとも考えられる。この問題に結論を下すためには、別の面からの検討が必要であるが、後述するように、これがシャール・アッバースのもとで大々的に改められたことは、間違いないところである。

ラムトン、マフムディヤーン、キャラムが用いた資料は、「シェイフ「バハーイーのトゥーマール」とされているが、それはサファヴィー時代のトゥーマールそのものではない。後に述べるが、一九二〇年代にサファヴィー朝のものを基にして改訂が行われ、これを二三〇七（一九二八）年、エスファハン財務局（*Edāreh-ye Māliyah-ye Esfahan*）がエスファハン文書・土地登記所（*Dāreh-ye Šab'e Asad va Amlaki-ye Esfahan*）で登記した。これも「シェイフ「バハーイーのトゥーマール」と称されており、先にあげた主文に続き、用水区別の持分、用水区・マーディー（用水路）別の水役割り当て数、マーディー・村落別の持分、村落別の水利費賦課額、マーディーの一覧表よりなっている（数字はスィヤーク書体で書かれている）。ラムトンはエスファハン財務局で「トゥーマール」を入手したが、これは一九二八年登記のものであり、マフムディヤーンが利用したのもこれである。キャラムは、トゥーマールの用語と受益村はサファヴィーのものとは異なるとしているが、それも一九二八年の文書を見ていることによる。

この川の用水配分の資料はこのほかにも残されている。まず、『エスファハン地誌』（三八一四一ページ）には、マーディー名と各マーディーから水を引く村落数の記載がある。この書の著述は一八七五年に始まっており、これは一八七〇年代の実態を伝えるものと思われる。

また、『エスファハン・レイ史』（ジャーベリー・アンサーリー著）の一〇七―一五〇ページにも、マディーゴとの持分・受益村の記述がある。アンサーリーはここで、「これらはサファヴィーのトゥーマールを写したものであり、現在、相違があってもそれは筆者の責任ではない」と述べている。<sup>(10)</sup>これを『エスファハン地誌』と比較すると、これより古いことが明白であり、アンサーリーの記述はサファヴィー時代のものともみなしてよいであろう。アンサーリー家の先祖にはサファヴィー朝・アフシャル朝・ザンド朝下で官吏を務めたものが多く、この中には要職を占めた者も少なくない。著者の父も官吏であり、彼自身も役人となった。一族のモシーロール・モルクは知事ゼッロツィルタンのヴァジールを務めている。また、サファヴィー朝の行政便覧の一つ、『ダストウール・モルク』の著者ラフィーウッディーン（Mirzā Rafī al-Dīn Mostoufi al-Mamālek）<sup>(11)</sup>もその先祖の一人である。アンサーリーは先祖が遺した文書も使って、社会経済史的に貴重な情報に富む本書を著したが、水利に関する部分は同家に伝わったサファヴィー時代の配水文書を転載したものと思われる（また、本書の巻末には、一九二八年登記の村落別持分表もある）。

次に、一九二八年登記の文書、『エスファハン地誌』とアンサーリーを用い、用水配分の実態をみ、ついで、サファヴィー朝、カージャール朝下でこれがどのように更改されたかを検討しよう。

## 2 用水配分の実態とその特徴

### 1. 配水規制

トゥーマールによると、用水配分は次のようにして行われる。

各用水区ごとに持分が定められ、用水区内ではマードイー (mādī, 幹線用水路) ごと、マードイー内では受益村ごとに持分が定められている。そして、所定の配水期に、持分に応じた大きさに作られた取水口 (dar-e-sar-e-mādī) からマードイーに水が流され、各受益村へは *lāq* と称する取水口を通じて配水される。

### (A) 用水区

用水区をキャシーク (kashik) という。これは当時のボルク (bolak) ʾつまり、現在のデヘスターンとほぼ一致する。

用水区は次の7区からなる。

(1) レンジャーン (Lenjān) 区。最上流に位置し、アイドグマシユ (Aydogh-mash) ʾオシユヤーン (Oshyān) ʾオシユトルジャーン (Osh-torjān) に分かれる。バーバー・マフムード橋が区境をなし、現行政区では、アイドグマシユ全域、オシユヤーンとギャルキャン (Garkan) の大部分、オシユトルジャンの一部よりなる。



(2) アレンジャー (Alenjan) 区。現在のオシュトルジャーンの大部分とギャルキャンとオシユヤーンの一部が入る。

(3) マールビーン (Marbin) 区。現在のボルハール、オシュトルジャン、ギャルキャン、市区の一部も含む。

(4) ジェイ (Jey) 区。

(5) ケラーレジュ (Kerarej) 区。現在のジェイの一部も含む。

(6) バラーアーン (Barāan) 区。現在のジェイの一部も含む。

(7) ルーダシュテイン (Rudastain) 区。

## (B) 水利暦

用水配分に用いられた暦法は、春分を歳首とする太陽暦である。各月は三〇日よりなる。

## (C) 自由期と規制期

### (イ) 自由期

牡羊座一日 (三月二日) から双子座一五日 (六月三日) までの七五日間、および射手座一日 (十一月一六日) から魚座三〇日 (三月一五日) までの一二〇日間、つまり、十一月一六日から六月三日の一九五日間は、規制外で自由に引水できる。この期間はアーザード (自由な) とよばれる。<sup>(12)</sup>

ザーヤンデルードの用水配分に関する一考察 岡崎

(ロ) 規制期

双子座一六日(六月四日)から蠍座三〇日(十一月一日)までの一六五日間は、次のような方法で配水される。

(D) 用水配分

規制期の一六五日間、全用水は三三サフム(§§§§)に分けられる(一サフムあたり五日)。各用水区の持分は次の通りである。<sup>(13)</sup>

レンジャー	六サフム	(三〇日)
アレンジャー	四サフム	(二〇日)
マールビーン	四サフム	(二〇日)
ジュイ	六サフム	(三〇日)
ケラーレジュ	三サフム	(一五日)
バラアー	四サフム	(二〇日)
ルーダシュティン	六サフム	(三〇日)

配分は最下流のルーダシュティンから始まる。双子座一日から一五日間(六月四日から一八日)は他の用水区のマードーはすべて閉鎖され、ルーダシュティンに独占的に配水される。このように、一用水区に排他的に配水することをヴォネシュ(vonesh)という。この期間を、ドゥーナブ(dunab)というが、これは「小麦が稔り始

める頃に与えられる水」を意味する。また、この区の残りの一五日程は、蠍座一六日から三〇日（十一月一日から一五日）までに配水される。これもヴォネシュで、この水は「ハーカーブ」(Khakab)と呼ばれ、「小麦に初めて与えられる水」である。この区は規制期の初めと終わりにヴォネシュで配分を受けるが、水を最も必要とする夏にはザーヤンデルドの水は使えない。六月一九日から一〇月三十一日までの四か月半は、余水を利用するか、他の用水源に頼らざるをえない。

残りの一三五日は、他の用水区の間で次のように配分される。

(イ) 播種期 (bashtari)

天秤座一九日（一〇月五日）から蠍座一五日（一〇月三十一日）までの二七日間は、麦類の播種のために、次のように配分される。

六用水区の受益村のすべてが同時に取水できるほど水量が豊富な年には、サルキヤルデ (sarkarden)<sup>(14)</sup> による。

サルキヤルデとは、用水区別に取水期を定めず、各マーディーの持分に応じ、取水口を所定の大きさにし、毎日、全マーディーに水を流す方法をいう。<sup>(15)</sup> しかし、水の少ない年には、一持分当たり一日とし（ルダシユティンを除き二七日となる）、用水区ごとに日を定め、ヴォネシュによって配水する。<sup>(16)</sup>

(ロ) 田植え期 (tilaki)

蟹座一日から三〇日（六月一九日から七月一八日）は、トゥーラキー（エスファハンの方言で「田植え」をいう）と称し、稲作と夏作のために次の四用水区のみにヴォネシュによって配水される。レンジャー・アレンジャー

ザーヤンデルドの用水配分に関する一考察

岡崎

第六十九卷 三二七

に初めの九日間、ついでマールビーン・ジェイに六日間、これを二回行<sup>(17)</sup>う。

(ハ) 夏期減水期

獅子座一日から天秤座一八日(七月一九日から一〇月四日)までの七八日間は、上記四用水区の間で次のように輪番給水される。

つまり、初めの六〇日間はレンジャー・アレンジャーに九日間、マールビーン・ジェイに六日間の配水を繰り返し、残りの一八日間は前者に一日間、後者に七日間とされる。<sup>(18)</sup>

トゥーマール記載の配分スケジュールをまとめると、表1のようになる。ここで注目されるのは、実際の配水は先にあげた三三持分に応じてなされていない、という点である。たとえば、四サフムの権利があり、本来、二〇日間引水できるはずのバラアーンは、実際には「播種期」に四日間(一〇月二八日から三一日)配水されるのみである。「田植え期」と「夏期減水期」、つまり、六月一九日から一〇月二四日までの間は、サルキヤルデが行われる年を除き、用水配分を受けられない。

用水区別の持分日数と実際の配水日数を比較すると、次のようになる。

持分 配水日数

ルーダシユティン

三〇日——三〇日

ケラーレジュ

一五日——三日

バラアーン

二〇日——四日

表 1 ザーヤンデルードの用水配分スケジュール

用水区 (kashik)	持分		給水日数	双子座 (ホルタード) 16-30日 (6-4-6-18)	蟹座 (テイール) (6-19-7-18)	獅子座 (モルタード) (7-19-8-17)	乙女座 (シヤハリ) (8-18-9-16)	天秤座 (メヘル) (9-17-10-16)	蠍座 (アーバーン) (10-17-11-15)	
	サ ム	日 数								
レンジャー・アレンジャー	10	50	75		9日 →	9日 →	9日 →	11日 →		
パールビーン・ジェイ	10	50	53		6日 →	6日 →	6日 →	7日 →	10日 →	
ケラーレジュ	3	15	3						3日*	
バラーアーン	4	20	4						4日 →	
ルーダシエイン	6	30	30	15日 →					15日 →	
33	165	165		dūnāb (15日)	tūlakī (30日)	(78日)			bazrkārī (27日)	khākāb (15日)

\* 歳座 9日—11日 (10月25日—27日)  
☆ 歳座 12日—15日 (10月28日—31日)

表 2 規制更改による変化

用 水 区	持 分		配水日数 (B)	受益村数 (1928) (C)	村落規模 (人)	1村当り受給日数	
	サラム	日数 (A)				改訂前 (A/C)	改訂後 (B/C)
[上流部]							
	レンジャー	}	}	124	670	}	}
	アレンジャー	10	50	73	657	0.25	0.38
	マールビーン	}	}	78	1057	}	}
[下流部]	ジェイ	10	50	107	451	0.30	0.29
	ケラーレジュ	3	15	28	286	0.65	0.11
	バラーアーン	4	20	77	123	0.29	0.05
	ルーダシエイン	6	30	68	205	0.46	0.44
計	33	165	165	555	532		

- 1) 村落の人口は、Farhang-e Joghrafiyā-ye Irān, vol. 10 (1953) から算出。  
 2) 更改前の村落数は不明であり、1928年のものを使用。

表 3 ヲーディー・受益村数の変化

用水区	ヲーディー数		受益村数			
	サフアヴィー	カージヤール (1870's)	1928	サフアヴィー	カージヤール (1870's)	1928
レンジャー アイトグマジュ オジュヤーン オジュトルジャー アレンジャー マールビーン ジェイ ケラールジュ ハラーアーン ルーダジュティン	( ) <sup>2</sup> ( ) <sup>2</sup> (11) 16 7 6 2 14 6	51 (14) <sup>1)</sup> (18) <sup>1)</sup> (15) 18 8 6 4 15 3	60 (19) (23) (18) 22 10 7 5 15 8	( ) <sup>2)</sup> ( ) <sup>2)</sup> (67) 63 66 97 23 68 64	111 (14) <sup>1)</sup> (19) <sup>1)</sup> (74) 70 88 112 26 53 66	124 (23) (29) (72) 73 78 107 28 77 68
計		105	127		526	555

1) 4ヲーディー、4村落欠落している。

2) サフアヴィー朝期のこの用水区のデータは記載がない。

出所) サフアヴィーは、Jābert-ye Anṣārī, *Tarīkh-e Eṣfahān va Rei*, pp. 107-150.

カージヤールは、Taḥvīdār-e Eṣfahān, *Joghrtāfā-ye Eṣfahān*, pp. 38-41.

1928年は、筆者が1976年に入手したトゥーマールのコピー。

サーヤンデルドの用水配分に関する一考察 岡崎

レンジャー・アレンジャー 五〇日——七五日

マールビン・ジェイ 五〇日——五三日

ケラーレジュとバラアーンは、市より下流に位置する。この二区は持分日数が著しく減らされ、一方、レンジャーなど上流部四区の配水日数が大幅に増やされている。つまり、このトゥーマールによると、灌漑用水を必要とする期間は、エスファハン市より上流部の四区が用水を独占しているのである。これはサファヴィー時代の改訂、つまりシェイフ・ハーイーのトゥーマールによって変更されたものであるが、この点については、次章で詳述する。

## 2. ミーラプと用水管理

イスラム法によれば、大河川はイスラム共同体の共有財産であり、その管理は国家が司るものとされていた<sup>(19)</sup>。ザヤンデルドはイラン第二の河川であり、国の管轄下にあった。ザヤンデルドのミーラプ(Mirāb-e Dar al-Saltaneh-ye Esfahan)は、サファヴィー前より流域の中央に位置するジェイ区のキャドホダーの中で最も信頼の厚い者が選ばれるのが慣例化していた<sup>(20)</sup>。

ザヤンデルドのミーラプの職掌については、『タズケラトル・モルーク』<sup>(21)</sup>ならびに『ダストウーロル・モルーク』に次のように記述されている<sup>(22)</sup>。

(イ) マーディー・サーラール(マーディーの水番、受益村から互選される。)の任免。



(ロ) ノウルーズの夜、マーディー(幹線用水路)ならびにナフルおよびジャドヴァル<sup>(23)</sup>(ともに支線用水路)の土さらいを農民に命ずる。

(ハ) 所定の持分に基づき、水利権を有する村に用水配分を行う。

(ニ) 水利権侵害の監視。

(ホ) 水論の裁定。

ミーループは王領地庁(Sarkar-e Khasseh-ye Sharifaneh)<sup>(24)</sup>に属していた。『タズケラトル・モルーク』には、主たる役人の俸給表があるが、ミーループについてはない。<sup>(25)</sup>『ダストウーロール・モルーク』によると、ミーループには、毎年、王領地から俸給が支給されていたが、その額はさして多くはなかったようである。

ミーループは地位の高い役人ではなかったが、彼は受益村から一定額の報酬(mavajeh-e mirabi)を受け取り、さらに水利権者からはさまざまな形で贈り物さらに賄賂を受け取っており、ケンペルによると、その収入は同庁の長官(Nasir-e Boyutah)よりも多かった。シャルダンによると、それは四、〇〇〇トマンに達していた。<sup>(26)</sup>ちなみに、長官の俸給は六〇〇一、五〇〇トマン、アッバース二世のフランス人お雇い金細工師のそれは三〇一四〇トマン、各種王宮工房の長は二〇一四〇トマンにすぎなかった。<sup>(27)</sup>

用水は用水区単位に配分される。配水を受けないマーディーの取水口は閉鎖するが、これは他区から調達された農民(マルデ・カーセド mard-e qased。一九二〇年代には二七五人)によってなされる。閉鎖の前日にミーループがカーセドを召集し、所定のマーディーへ行くように命ずる。そして、刈り株(shush)とマルグ(margh)という

草を集めさせ、翌朝、日の出から二時間以内にマーディーを閉鎖させ、適切に閉鎖されているのを確認し、封印する。<sup>(28)</sup>カーセドには報酬が支払われるが、それは閉鎖するボルクに課される *rosūn-e noukar-e mirābī* から与えられた。

各村への引水は、マーディー・サーラールがもっている配水文書に基づいてなされる。

ミーループは用水配分に全権を有し、水利秩序の維持に重要な役割を果たしていた。政情が安定している時には、ミーループはその機能を果たしたが、ミーループが権力によって廃止された時もあった。一八七七年から九〇年頃に著述された『エスファハン地誌』によると、「ザーヤンデルドにミーループはおらず、ボルクの徴税官の管轄下に置かれていた」。<sup>(29)</sup>しかし、同書には、著者の弟は長くミーループを務めていたとの記述もある。<sup>(30)</sup>カージャール朝時代には、後述するように、知事や有力者による恣意的な引水がなされたが、一九世紀後半、知事のゼッロツ・ソルタンによって、ミーループが廃止されたのであろう。

またサファヴィー朝下では、シャーは他の州にもミーループを置き、規模の大きな河川を直接支配・管理していたようであり、<sup>(31)</sup>ケンペルは、「灌漑用水の賃貸によって（シャーは）多くの収入を得ている」と述べたのち、ファールス州知事の言として、ファールスのバンデ・アミール（コル川にかけられた堰）のみで、年に数千トマンをシャーに納めていた、と伝えている。<sup>(32)</sup>

### 3 用水規制の更改

#### 1. サファヴィー朝下における更改

第二節で述べたように、水は三三持分に分けられていた。しかし、サファヴィーのトゥーマールによると、持分通りに給水されたのはルーダシュテインのみであった。それも秋と春に麦畑に灌水されただけで、夏には配水されていない。

また、市より下流のケラージュとバラアーンはそれぞれ一五日間と二〇日間配水されるべきところが、三日間と四日間しか給水されていない。バラアーンとケラーレジュは、かつては六月一九日―一〇月四日の間に二八日間持分を有しており、この水が夏作に使われていた。しかし、トゥーマールによると、「レンジャー・アレンジャーなどの価値のある夏作たる米作を考慮し、(二八日分は、この二用水区から)削減され、レンジャーの持分に加えられ」た。<sup>(33)</sup>このようにして、六月中旬から一〇月までの夏の用水需要期にバラアーンとケラーレジュは余水しか利用できなくなり、一方、レンジャー・アレンジャー・マールビン・ジェイの四区は、この期間中、本来一〇〇日であったが一二八日間、用水配分を受けることになった。つまり、表1からも明らかのように、四区は夏の用水を事実上、独占することになった。

第二代のタフマースプの下で、エスファハンにおける土地の開発は進み、また、市周辺の土地の大半は王領地

(ハーレセ)になった。そのため、王朝は従来の配水慣行の変更を望んだ。

シャー・アッバースの下で、王朝は最隆期を迎えた。エスファハンは首都になり(一〇〇五、一五九六/九七)、地域も拡大し、人口も増えた。シャルダンによると、この町は人口六〇万の世界有数の大都市になった。<sup>(34)</sup>王朝にとり、巨大化した都市の生活用水の確保は緊急の課題であった。

イランではサー・サーン朝以来、蟹座(ティール月)一日に「アーブ・リーザン」または「アーブ・パーシャー」と称する「水かけ祭り」が行われてきた。サー・サーン朝時代、ファールスが大旱魃に襲われた年、待望の雨がティール月一三日に降った。人々は互いに水をかけあつて喜び、これ以降、水かけが年中行事の一つとなったといわれる。シャー・アッバースは、「王の広場」で行われるポロの見物、狩り、魚釣りのほか、水かけ祭を見物するのを大きな楽しみとしており、彼の時代、とくにエスファハンでこの祭りは盛大に催された。楼閣橋「十三大橋」(Si-o-Se-Pol)に顯官や外交官を招き、シャーはザーヤンデルドや用水路(マーディー)の中で行われる水かけ祭りを一日中見物した。この日に一万をこす市民が川に入り、水をかけ合い、川の水が干上がるほどであったという。<sup>(35)</sup>夏の水量減少期であるにもかかわらず、この祭りをより盛大にするために、シャーは市内への用水供給を増やそうと考えた。

政情安定のもとで農業は再び活況を呈し、この州の土地開発が積極的に行われ、多くの新田が造成された。一三二九年に八〇〇村にすぎなかったエスファハンは、一六七〇年には一、五〇〇村を数えたという。<sup>(36)</sup>このような事情は必然的に水利秩序の混乱をもたらし、トゥーマールにあるように、水論が続発した。

タフマースプが王領とした土地に加え、シャー・アッバースは有力者の土地をも兼併、さらに新田を興し、王領地は一層増加していた。<sup>(37)</sup> とくに、レンジャーとアレンジャーの米作地帯で、シャーは王領地を増やした。

経済的な繁栄の結果、都市における米の需要がいちじるしく高まった。米は有利な商品作物であった。レンジャーとアレンジャーではとくに米作が進展し、ここでは、トゥーマールによると、各村三・三ジャリーブの水稲を栽培し、一、〇〇〇マン（約六トン）の粃を国に納入するよう定められていた。一、〇〇〇マンは収量の二分の一を越えており、これは税金ではなく、王領地における小作料を指すものと思われる。（ケンペルによると、水田の場合、王は収穫の五分の三をとっていた<sup>(38)</sup>）。配水慣行更改の理由の一つは、米作の保護・奨励にあったが、それは王領地における米作のためであった。つまり、王領地の生産性増大が、更改の主たる目的であった。

ここにあげたように、市より上流に集中する王領地への優先的な用水供給、王の娯楽用も含め都市用水の確保、水利秩序の回復のため、シャー・アッバースは用水規制の大々的な改訂を行った。用水配分は人々の利害に直接係わる重大問題であり、独断専横に行えば、反発を招きかねない。王領地に有利な更改をスムーズに行うには、有徳のシェイフ・バハーイーを登場させるのが、最も賢明な方法であった。そこで、宗教界の権威、バハーイーに立案させ、ここで前記のような、下流域のケラーレジュとバラアーンを犠牲にした規制を制定した。ただ、各用水区ごとに定められていた持分（全体で三三サフム）は名目的に残し、運用上、給水日数を変えするという方法をとった。

アンサーリーによると、バラアーンはサーサン朝下で繁栄を享受し、川の両岸には一面に豊かな耕地が広

がつていた。エスファハンが首都となり、レンジャーで米作が始まり、また王の娯楽のため水が止められるまでは、バラアーアーンでも米作が行われ、多くの園地があつた。<sup>(39)</sup>一九世紀初頭に、この地を訪れたJ・モーリアも、エスファハン市の東方は西方に比べ荒廃し、かつては貴族の居住地であつたシャハレスタンは今は荒廃していると記している。<sup>(40)</sup>

この両地区では、夏期の用水供給が断たれたため、米作は廃れ、夏作は井戸と、地下水を水源とし、開渠で導水するケイ(Kei)<sup>(41)</sup>に頼らざるをえなくなった(なお、この地方のケイは、川からの用水供給が断たれた後に作られたものかもしれない)。

更改による下流部の荒廃は数字にも現れている。つまり、表2から明らかなように、更改前は、この川の水はほぼ均等に配分されていたとみてよいが、更改後は不均衡が大きくなり、一村あたりの用水供給は上流部の〇・三〇・四日に対し、下流部では〇・〇五―〇・一日と大きな差ができた。これはまた、村落の規模に如実に現れている。アンサーリーは、「かつてはバラアーアーンには大きな村が多く、多数の村名が史書に残されている」と述べているが、バラアーアーンでは更改後は、村の規模は縮小した。ちなみに、一九五三年の統計でみると、上流三区は一村当たりの人口は六〇〇人を越えているのに対し、バラアーアーンでは一二三人にすぎない。

サファヴィー朝下においては、王の論理による用水配分が支配的であり、多くの村がその被害を蒙らざるをえなかった。

## 2. カージヤール朝下における更改

一七二二年のアフガンの侵入はこの地方に甚大な被害を及ぼした。アンサーリーによると、トルコ・モンゴルの侵入の影響は一時的なものにすぎなかったが、アフガンの侵入、それに続く戦乱の影響は長く続き、二〇〇年もその痕跡が残ったという。ザンド朝のキャリム・ハンの死（二七七九）に伴うザンド族の内訌、カージヤール族とザンド族の間の抗争はエスファハン地方にも大きな影響を及ぼした。二〇年にもわたる戦乱によって、この地方は疲弊し、かつては多くの人口を擁した町（カサベ）も荒廃し、ザーヤンデルド流域の広大で肥沃な土地も荒地と化してしまった。

このような事情は土地所有のみならず、水利秩序にも大きな混乱をもたらした。また、政情不安によりカナートの維持管理も適切になされず、多くのカナートが使用不能となった。一九世紀初めになって、ようやく政情は安定したが、住民は染色、紡績、皮なめしなどで生計をたて、土地と水を求める者はいなかったという。<sup>(43)</sup>

重税にあえぐ地主達は土地を手放した。さらに、一八〇四／〇五年のイナゴの害により、翌年分の種子すら残すことのできない土地所有者も多くでた。ここで、知事のサドレ・エスファハーニー（のちに、ファタリー・シャーの宰相になる。在職一八一九—二三）は、農業を営む力をなくしたこれらの土地所有者達やワクフのモタヴァツリーから、私有地やワクフ地を安く買取ったり、借地したりした。さらに、国有地を有利な条件で借地し、新田開発を積極的に行い、所有規模を拡大、一九世紀前半の大土地形成者の一人となった。<sup>(44)</sup>

サドレ・エスファハーニーはエスファハンの繁栄に貢献したとされているが、同時に、水利権の侵害も行った。彼は混乱に乘じ、自己の土地に有利なように水利慣行を変えた。マールビーンの三マーデー、ジェイの一マーデーで村の持分を一部変更したことがトゥーマールに記載されているが、それは一例にすぎない。<sup>(45)</sup>彼はまた、マーデーをいくつか新設している。農民に種子と土地を与えただけで、小作料として収穫の四分の三も取っていたといわれるが、それはマーデーを彼が作ったことによるという。<sup>(46)</sup>

ナーセレッディーン・シャヤーの長男で、一二八三（一八六六／六七）年から一三二四（一九〇六／〇七）年までエスファハン州知事を務め、さらに全盛期には（一八八七年）、ファールス、フーゼスターン、ヤズド、ケルマンほか多くの州の知事を兼任し、イランのほぼ半分をその支配下においていたゼッロツ・ソルタンも、権力によって水利権の侵害を行った。彼はみずから多くの村を興したのみならず、地主達から没収同様にして土地を取得し、<sup>(47)</sup>イランで最大の地主の一人となっていた。さらに、彼は国有地も借地(mogata'eh)していた。ゼッロツ・ソルタンの土地はエスファハンの米作地帯である上流部に集中しており、彼は自己の土地に有利なように、ザーヤンデルドの水を取り入れていた。<sup>(48)</sup>

地誌が伝えるように、この時代には、新田開発とともに、マーデーの開削も進んだ。ゼッロツ・ソルタンの子、アクバル・マスウッド・ミールザーが、一九一〇年代に、九〇、〇〇〇トマンの巨費を投じ、バーゲ・ヴォフシユ・マーデーを作ったのはその一例である。<sup>(49)</sup>サファヴィー時代の実態を示すと思われるアンサーリー、一八七〇年代の『エスファハン地誌』、一九二八年登記のトゥーマールの三種の資料に記載されているマーデー名を比較し、



マーディー数の変化を示したのが表3である。これより、『エスファハン地誌』以降、つまり一八七〇年代以降、二二本のマーディーが新たに作られたことが分かる。そして、これらのマーディーはその大半がゼッロツソルタンが主要な地主となっているレンジャー、アレンジャーなど市の西方に集中している。このことは、マーディーの多くが、彼の手によって建設されたことを窺わせる。

このようなマーディー新設は、既得権の侵害をもたらず。既存のマーディー、村落の中に、持分を減らされるものが多出し、水利秩序が混乱した。

ゼッロツソルタンは自己の保有する土地（私有地と借地していた王領地）を、一年契約で高い借地料を提示する者に一括して貸し付けていた。一九世紀末にゼッロツソルタンの土地を借地していたのは、エスファハンのモッラー・バシであった。彼は、一九〇四年、四、〇〇〇トマンを提示したミールザ・アリー・ハンが借地するまで、長期間にわたりゼッロツソルタンの土地の借地人であった。<sup>(50)</sup>

一八九九／九〇年の冬、降水量が少なく、また翌年も雨が少なかった。ザーヤンデルドの水量は著しく減少した。ここでモッラー・バシは、自分が借地・経営している土地の用水を確保するため、自由取水期（六月三日まで）であるにもかかわらず、五月七日ごろからザーヤンデルドの水をレンジャーで堰止め、下流には水を流さなかった。下流のエスファハン東部では事態は深刻になり、英領事報告によると、五月の終わりには水利権者二〇〇〇人ほどがマスジデ・シャーに集まり、エスファハンでゼッロツソルタンに次ぐ権力者であったアガーナジャファイ（マスジデ・シャーにホウゼー学院をもつモジュタヘド）に嘆願した。しかし、アガーナジャファイは

これを無視、またゼッロツソルタンもモッラー・バシの行爲を黙認していた。<sup>(51)</sup> そのため、東都では、水不足のため作物は甚大な被害を被った。

このように、カージヤール朝下では、有力者による水利慣行を無視した取水が行われ、<sup>(52)</sup> 一八七〇年にはすでに「サファヴィーの配水法は名目的なものでしがなく、廃れてしまっていた」<sup>(53)</sup>。

サファヴィー朝からカージヤール朝時代を通じ、ザーヤンデルドの用水配分には権力の論理が強く作用した。農業を営むための最も重要な要素である水を、権力が意のままにした。

ゼッロツソルタンが絶対的な権力を有している間は、用水配分に対する不満は沈潜していたが、二〇世紀初頭、ゼッロツソルタンの権力が弱化するや、水利権者達はサファヴィー朝の規制通りに用水配分を行うよう政府に請願を繰り返した。しかし、立憲革命という政治状況の大きな変化にもかかわらず、事態はなんの進展もみなかった。水利権者の要求が実現したのは、ようやくレザーシャー期になってからであった。ゼッロツソルタンが死亡し（一九二七／一八）、レザーシャー（一九二五—四二）初期に、時の有力者の一人、ハジミールザーポナクダールプール邸に、上流部からアクバルマスウッド（ゼッロツソルタンの子）の一派が、そして下流部からはシヤリーアトメダール一派が集まり、配分規制改訂のための会合がもたれた。そして、話し合いを重ねたうえ、サファヴィー朝下の慣行を若干修正した規制が作られ、知事がこれを認可し、ここに配水慣行の混乱に終止符がうたれた。これまでスイヤーク体で書かれていたトゥーマールは印刷体書き改められ、文書登記法の施行に伴い、一三〇七（一九二八）年に登記され、現在もこれが若干修正され、実施されている。



- (21) 本書は著者不明とされているが、ダーネシユンジュ一氏は、本書の写本の一つに付されている序文から、ミールザー=サミール Mirzā Šamī'a (Rustam al-Tavārikh の著者 Rustam al-Hokmā の曾祖父の兄弟) によつて、アシトラフ=フカーンのために一七二四—二五から一七二九—三〇年頃に著された、と述べてゐる。
- (22) *Tadhkirat al-Mulūk*, tr. by V. Minorsky, Gibb Memorial Series (Cambridge, 1943), p. 83; *Dastūr al-Mulūk*, pp. 104-05.
- (23) 川から引かれている幹線用水路をブーデイー (mādī) ブーデイーから分かれる水路をジャドヴァル (jadvar) ジャドヴァルから分かれるものをジューイ (jui) と呼ぶ (Kaempfer, *Der Darbār-e Shāhanshāh-e Irān*, tr. Kaykāus Jahāndār, Tehrān, 1350/1971, p. 188).
- (24) "sarkār," in Moḥammad Mo'in, *Farhang-e Fārsī; Dastūr al-Mulūk*, p. 105.
- (25) *Tadhkirat al-Mulūk*, pp. 85-100.
- (26) Kaempfer, pp. 103-04; Chardin, *Siyāhat-nāmah-ye Shīrāzī*, tr. Moḥammad 'Abbāsī (Tehrān, 1345/1966), vol. 4, p. 305.
- (27) Kaempfer, pp. 151, 155; *Dastūr al-Mulūk*, p. 55.
- (28) *Tāmūr*, p. 6, ll. 1-7.
- (29) *JE*, p. 128.
- (30) *ibid.*, p. 74.
- (31) Chardin, vol. 4, p. 305.
- (32) Kaempfer, p. 117.
- (33) *Tāmūr*, p. 4, ll. 8-9.
- (34) Chardin, vol. 7, pp. 50-51.
- (35) 拙稿「タナーの結婚と水かけ祭」『博覧』三一一—一二八頁。
- (36) Chardin, vol. 6, p. 125; P. Petrushevsky et., *Tārīkh-e Irān*, tr. Karīm Keshāvarz (Tehrān, 1354/1975), p. 533.
- (37) Nasrollāh Falsafī, *Zendegānī-ye Shāh 'Abbās Aṭval*, vol. 3 (Tehrān, 1353/1975), p. 271.
- (38) *Tāmūr*, p. 4, ll. 15-18; Kaempfer, p. 127.
- (39) Ansāri, pp. 140-41.
- (40) J. Morier, *A Second Journey through Persia, between the Years 1810 and 1816* (London, 1818), p. 138.
- (41) 拙稿「イラン農業水利史に関するノート」『アジア経済』二二一—六(一九八〇・六) 七二—七四頁。

- (42) Anṣārī, p. 141.  
 (43) *ibid.*, pp. 41-42, 92.  
 (44) Anṣārī, pp. 41-42; Maḥmūdīyān, p. 97. 彼はカーシヤーン  $\text{كاشاني}$  一五〇本のカーナールを開設している。  
 (45) *Ṭīmūr*, p. 22, ll. 7-17, p. 21, ll. 11-17.  
 (46) Morier, p. 154.  
 (47) S. Shafaqī, *Joghrtāyā-ye Eṣṣafāhān* (Eṣṣafāhān, 1353/1974), p. 293.  
 (48) Maḥmūdīyān, p. 97.  
 (49) *ibid.*, pp. 97-98.  
 (50) Great Britain, Foreign Office(FO), 248-820, Ispahan, from Aganoor, No. 6, Feb. 1, 1904.  
 (51) FO, 248-742, Ispahan, from Aganoor, No. 21, May 21 and No. 30, Aug. 13, R. M. Burrell, *Aspects of the Reign of Muzaḥfar al-Dīn Shāh of Persia*, Ph. D. Thesis, University of London, 1979, p. 254.  
 (52) Maḥmūdīyān, p. 97.  
 (53) *JE*, p. 41.

なお、本稿は、昭和六一・六二年度文部省科学研究費補助金・総合研究(A)「ヘルシア語文化圏の成立と展開に関する総合的研究」(研究代表者・志茂碩敏)における研究成果の一部である。